

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

15号巻頭言

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日本赤十字九州国際看護大学 メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/534

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-ShareAlike 3.0 International License.



日本赤十字九州国際看護大学紀要 第15号に寄せて

日本赤十字九州国際看護大学
学長 田村 やよひ

福岡県は今年、自然科学の領域で世界的な功績をあげた二人の科学者を生み出した。誇らしく思っている人も多いに違いない。

化学の教科書でなじみの周期表で空白だった113番目の元素、ニホニウム(Nh)を発見した森田浩介氏は九州大学教授、細胞のオートファジーについて分子レベルでそのメカニズムを解明し、ノーベル医学・生理学賞を授与された大隅良典氏は県立福岡高校の卒業生である。

新聞やテレビで報道された二人の言葉は、基礎化学、基礎生物学の研究者としてだけでなく、応用科学、人間科学の領域の者にも深く共感できるものである。森田教授は科学者の心構えとして、「好奇心を持ち、謎に挑み、根気よく調べる。不思議に思う感性を大切にしたい」、大隅教授は「誰もやらないことをやるのが楽しい。それが科学的精神だと思う」と受賞決定直後に述べている。ノーベルレクチャーにおいては、「科学を何かに役立てるためのもではなく、文化としてとらえ、育んでくれる社会になってほしい」と、すぐに結果を求める昨今の研究環境への批判も忘れていない。

看護学研究は人間の尊厳と健康、そして生活を支えるための研究である。時間軸をどこに置くかは別として、基本的には役立つ研究であることが求められている。そこは基礎科学とは一見異なるようにも思われるが、オートファジーの研究成果は神経変性疾患や癌などの研究への応用が期待されていることも事実である。

12月初旬、東京で開催された第36回日本看護科学学会学術集会は、「国民の幸せをもたらす制度設計と看護研究」のテーマのもと、政策提言につながる看護研究をいかに推進していくかが、多面的にそして熱く議論された。超高齢社会における看護学研究を、国民の生活の質の向上に貢献できるようにするには、結果を求めなければ意味をなさないことも明白である。研究デザインの段階から、実現したい政策に有用な研究結果を生み出すよう意図的な研究も推奨された。また、特別講演「Future Earthの活動を通してみる科学と社会のつながり」では、看護学研究者の参加が呼びかけられた。持続可能な地球環境をどう作っていくかは、人間の生活活動、生存と深くかかわるからである。

看護学研究の分野でノーベル賞受賞は考えられないが、私たちは人々の尊厳と健康のために、健康にかかわる人間の反応やそれを取り巻く環境に疑問を持ち、知的好奇心を満たすべく、根気強く研究を進めることだけはできよう。日本赤十字九州国際看護大学紀要に掲載された論文が契機となって、さらに多くの意義ある研究が生まれることを大いに期待している。

2016年12月